

聖書：ヤコブ 2：8～13

説教題：さばきに打ち勝つあわれみ

日時：2017年9月3日（朝拝）

前回に続いて「えこひいき」の問題が扱われています。著者ヤコブは、迫害によって散らされたユダヤ人クリスチャンたちにこれを書いています。彼らに見られた姿は、経済的に富む人たちを重んじる一方、貧しい人たちを軽蔑的に扱うということでした。この章の2～3節にその具体的な例が語られています。会堂に二人の人が入って来ます。その内、金の指輪をはめ、立派な服装をした人には「さあさあ、こちらの良い席にお座りください」と案内する一方、貧しい人には「あなたはこの辺で立っていなさい。座りたいなら私の足もとにでも座りなさい」と言う。明らかな差別、えこひいきです。なぜ彼らはこんな振る舞いをしていたのでしょうか。この手紙の読者たちは迫害によって、それまで住んでいた地を追われて、経済的・社会的に圧迫された状態にありました。そして新しい土地で何とか生き延びようとして、お金持ちに目を留め、彼らにおもねり、彼らとの関わりを大事にする一方、そうでない人たちを軽んじ、見下す傾向があった。また互いの地位を巡って言い争ったり、戦ったりしていた。まさにこの世での生き残りをかけたサバイバルゲームです。そんな彼らにヤコブは、そのあり方は栄光の主イエス・キリストを信じる信仰と一致しないと語ります。今日の箇所では、あなたがたはそれとは別の生き方に召されているはずだということを語ります。

まず8節でヤコブは「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という律法を引用します。これが私たちクリスチャンが基準とすべきルールであるとヤコブは言おうとしています。ここに「最高の律法」と出て来ますが、そこに印がついていて、欄外の8を見ると、あるいは「王の律法」と記されています。そしてこちらの方が適切な訳であることが多くの注解書に記されています。ヤコブはここで律法の中の「最高の戒め」について論じようとしているのではなく、これが私たちの「王の戒め」であることを述べようとしていると。5節にも信仰者は「御国を相続する者」と言われていました。すなわち主イエスを王とする御国です。その御国の民は、この王の律法を守って歩む者たちである。他の国の民はいざ知らず、御国の民はその国の王の律法に従って生活して行くべき者たちです。

さてこの王の律法、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という御言葉を聞

いて、私たちはどうでしょうか。これはレビ記 19 章 18 節にある言葉で、旧約時代から示されて来た言葉です。イエス様は律法をまとめて「神を全身全霊をもって愛せよ」とともに、この「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」が律法の要点、要約であると言われました。しかしこれほど私たちにとって難しいと感じる御言葉もないのではないのでしょうか。もちろん聖書の言葉は全部難しいとも言えますが、これは読んだ瞬間に私たちの無力性を深く自覚させる言葉だと思います。私たちの自分に対する愛は特別です。何があっても自分だけはかわいい。自分だけは例外。自分だけは色々自己弁護します。しかしそれと同じように周りの人々を愛せよとあります。とても厳しい言葉です。できればあまり深く考えず、もっと恵まれる御言葉を聞きたいと思うものです。しかし私たち、主イエスを王とする民にとっては、単に厳しい言葉であるというだけではないでしょう。イエス様はこの戒めの大切さを教え説かただけではなく、ご自身がその通りに歩まれました。すなわちご自身を愛するように、私たちを愛してくださいました。本来、聖なる神であるキリストは、私たち罪人を見捨てても良かった。何か汚い物を見てしまった！と一瞥した後、目をそむけて、ご自身はきよい領域の中を歩み続けても良かった。しかし私たちの王は、私たちを心に留め、ご自身のように愛して地上に来てくださいました。そして言葉を尽くして教え歩き、あわれみのわざをされました。そしてついには私たちのためにご自身の尊いのちさえも投げ出して、私たちを救いの恵みへ導き入れてくださいました。そのことを知る私たちにとって、この戒めはできれば目をそむけ、早く逃げてしまいたいと思う御言葉ではなく、私たちの王の姿を認めて感謝し、自らもこの王にならう歩みを！と祈らせる御言葉なのではないのでしょうか。もちろん私たちは地上にある間、完全にこれを実行することはできません。しかし私たちの王は、私たちもここに生きるようにと招いています。私たちの王に感謝する者として、いくらかでもその姿を映し出す歩みをするように！と。この王の律法こそ、御国の民の基準です。この律法に照らしたら、9 節にあるように、えこひいきは言うまでもなく違反です。その人は律法によって違反者として責められるとヤコブは言います。

さて読者の中には、これを聞いて、これは少し言い過ぎではないかを感じる人もいたようです。私は神の戒めを大方は守っている。違反者と言われるほど悪い生き方はしていないと。ヤコブはそんな彼らに 10 節で、一つの点でつまずくなら、全部を犯した者となったと言っています。そして 11 節でこう言います。「なぜなら、『姦淫してはならない』と言われた方は、『殺してはならない』とも言われたからです。そこで、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者となったのです。」 ポイントはすぐ

分かります。たとえ「姦淫してはならない」という戒めを守っていても、「殺してはならない」を破ったら、あなたは律法違反者となる。他の戒めを守っていれば、ある戒めは守っていなくてもいいということにはならない。一つでも犯したらアウトである！ということです。

しかしなぜヤコブはここで「姦淫してはならない」と「殺してはならない」の二つを取り上げたのでしょうか。ある人は、ヤコブは単純に二つの戒めを取り上げただけであって、内容には特にこだわっていない。ただ原則を示すために、良く知られた二つの戒めを取り上げただけであると考えます。一方である人は、ここで問題にされているえこひいきは人殺しに関係する。イエス様は、実際に人を殺さなくても、人を憎んだり、バカ者とののしることも、この戒めを破ることであると言われました。従って貧しい人を軽蔑し、その人格を無視することは人殺しの罪に相当する。一方、散らされていたユダヤ人は、周りの異教社会が不道徳に染まっている中、「姦淫してはならない」という戒めはしっかり守っているという自負心を持っていた。そういう彼らにヤコブは、姦淫していなくてもえこひいきによって他の人を殺しているなら、立派な律法違反である！と言おうとしたと見ます。魅力的な解釈ですが、本当に彼がそのように意図していたかどうかははっきりしません。いずれにせよ、ヤコブのポイントは、王の律法を一つでも破ったら、それであなたがたは律法違反者となり、さばかれるということです。そのことを良く考えて振る舞え！と言っているのです。

その際、ヤコブは 12 節で王の律法を「自由の律法」と言い換えています。すでにこの言葉は 1 章 25 節にも出て来ましたが、これは律法を私たちがどう考えるべきなのか、大切な視点を改めて教えてくれるものです。すなわち律法は私たちに自由をもたらすということです。「律法」と聞くと何か自分を束縛するものと私たちは考えやすいと思います。それに捕らわれないで、自分の心の赴くままに歩むことが自由だと考えています。しかし定められた領域を踏み越えて出て行くことは、私たちにとって自由ではなく死をもたらします。たとえば魚のことを考えても、水の中にいるのは束縛だと考えて、その外に出たら、そこで魚を待っているのは不自由であり、死です。魚は水の中という自分に定められた領域内にある時こそ最も自由です。同じように私たち人間は神のかたちに造られた者として、神の性質が反映されている律法の内に歩む時に実は最も自由を味わって生きることができます。そこに人間らしく生きる幸せが用意されています。ところが私たちはそこから離れて、好き勝手に生きることが自由だ

ととらえてしまっています。そして多くの人々はここから離れて歩むために、この世には多くの様々な悲惨が満ちています。私たちの場合を考えてみても、御言葉に従わず、これこそ自由だ！と思って進んで行ったところに本当の自由はあったでしょうか。むしろそこにあったのは幻滅であり、失望だったのではないのでしょうか。王の律法は私たちを拘束し、不自由にするものではなく、かえって自由を回復させてくれるものなのです。私たちを一層の幸いと喜びへ導いてくれる道なのです。

最後にヤコブは警告と励ましの言葉をもって、これまで語って来たことを強調しています。まず13節前半：「あわれみを示したことの無い者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。」ここでヤコブは最後のさばきの日へと読者たちの目を向けさせています。もし私たちがこの世で人々にあわれみを示さなかったら、かの日にどんなことが自分に起こるでしょう。それはあわれみのないさばきだ！とされています。恐ろしいことです！最後のさばきの日は、ある意味で私たちが最もあわれみを必要とする日です。地上のすべての行ないが一つ一つ調べられ、隠れていたことも明るみに引き出され、説明を求められる日です。その日にあわれみをいただかなかったら、私たちはどうなることでしょうか！それまで自分が他の人にあわれみを示して来なかったなら、その日になって、「主よ、あわれんでください！」と願っても聞き入れられません。ルカの福音書にある金持ちと貧乏人ラザロのたとえを思い起こしてもそうです。ですから私たちが地上でえこひいきをし、困っている人々にあわれみをかけないと、こういう恐ろしい将来を自分のために準備していることになります。

これと対になる言葉として13節後半にはこうあります。「あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。」これはどういう意味でしょうか。これは私たちがもし反対に地上であわれみに生きるなら、さばきの日に、それに打ち勝つあわれみに包まれるということでしょう。先ほども触れたように、最後のさばきの日は私たちにとって最も恐ろしい日です。しかしその恐ろしいさばきに向かって勝ち誇ると言えるほどのあわれみに支えられ、守られて、そこをくぐり抜けて行くことができる。これはもちろん私たちのあわれみの行ないが功績とカウントされて神から祝福を受けるということではありません。もし私たちが自分の良い行ないによって祝福を得ることができるなら、あわれみという考え自体いらないでしょう。私たちがかの日にあわれみを受け、そのあわれみに包まれて救われるのは、ただキリストのゆえです。キリストへの信仰を通してです。しかし大事なはこの点です。このイエス・キリストへの信仰によってかの日にあわれみ

を受ける人は、そのイエス・キリストに結ばれている者として、地上において他者にあわれみを示す人でなければならない。同じ原則はマタイの福音書 18 章の一万タラントを赦されたしもべのたとえにも示されています。あのしもべは一万タラント（今日に換算して約六千億円）という巨額の負債を王から赦されたにもかかわらず、出て行った直後、100 デナリ（今日に換算して約百万円）貸しのある人をあわれまず、その首を絞め、牢屋に投げ入れました。この行ないによって彼は自分が頂いた赦しを少しも感謝していないこと、それを何とも思っていないこと、従って本当の意味ではその恵みを受け取って生きていないことを現しました。従って王は彼を呼び出し、彼が他の人に対してしたように、彼を牢屋に投げ入れました。もしこれと反対にこのしもべが百万円貸しのある人を赦してあげたなら、彼は自分が本当に多くを赦された者であることを自ら証明したでしょう。マタイの福音書 6 章 14～15 節：「もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。」 私たちの行ないは、私たちが本当に神の恵みを受け取って生きているかどうかを表す証拠となるものです。従ってその証拠を示して生きている人は、神のあわれみの内に生きている者として、かの日にも大きなあわれみを期待することができる。自分に誇るべきものは何もないのに、その日に「あわれみはさばきに向かって勝ち誇る！」という神の素晴らしい恵みを究極的に体験また経験することになるのです。

私たちはどちらの世界に歩む者でしょうか。ここに二つの生き方があります。一つはこの世の栄光を求めるサバイバルの道です。自分の得につながりそうな人を重んじ、その人との関係を構築することにだけ苦心し、そうでない人は軽くあしらう。そうして他の人と争い、競争し、相手を蹴落としてでも上に上って行こうとする生き方です。しかしヤコブはクリスチャンにはそれとは違う生き方があると示しました。それは御国の民としての生き方です。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という私たちの王の律法に従う生き方です。私たちは何よりもこの律法の通りに歩いて私たちをご自分と同じように愛してくださった私たちの王のお姿をまずしっかり見つめたいと思います。そしてこの御国の民とされた者として、この王にならう歩みへ進みたい。ヤコブはこの王の律法に従うところに私たちの真の自由があると言います。最も人間らしい歩み、自由と解放と喜びを知って行く歩みがある。そしてこの主のあわれみの内を歩む時、私たちは将来についての偉大な慰めと確信を持つことができます。さばきの日「あわれみがさばきに対して勝ち誇る」ことを見て、私たちは神に心からの感謝をささげることに

なるのです。